F/T13
FESTIVAL/TOKYO

ARTS COUNCIL TOKYO

東京文化発信プロジェクト

TOKYO●2020

100% トーキョー / リミニ・プロトコル

作・構成：リミニ・プロトコル
（ヘルガルド・ハウグ、シュテファン・ケーギ、ダニエル・ヴェッツェル）
演出：ダニエル・ヴェッツェル

100% Tokyo / Rimini Protokoll

Concept, Format: Rimini Protokoll
(Helgard Haug, Stefan Kaegi, Daniel Wetzel)
Direction: Daniel Wetzel

11.29 (Fri) - 12.1 (Sun)
東京芸術劇場 プレイハウス
Tokyo Metropolitan Theatre, Playhouse

© Sandra Teth

演出ノート

ダニエル・ヴェッツェル

2011年、東京都区部の人口は9,055,257人、人口密度にすると1平方メートルあたり平均4.1人であると公表された。人口の49%は女性である。2.5%を占める外国人登録人口のうち、その大半は中国人だ（5人に2人）。25%は単身世帯で、ほぼ15%もの割合が70歳以上である。また、昼間と夜間の人口を比較すると、およそ3,000,000人もの違いがあるが、いずれにせよトーキョーの人口総体としては拡大し続けているのである。

統計は、政治討論や経済戦略のために、人々をひとまとめにし、グラフ上の図形や曲線へと落としこんだものだ。もし、この統計に表情を与えたらどうなるだろうか。もし、23区の人口の9,055,257人を、100人の人が舞台上で代表したらどうなるだろうか。

『100% トーキョー』は、この惑星上でもっとも人口が密集した都市の一つを標準化することに果敢に挑戦している。嘘、大嘘、そして統計まみれの世界で、この社会の縮図は、グラフでは決して表すことのできない現代の東京生活の本当の有様を語ることができるかもしれない。

『100% トーキョー』の出演者探しは、4カ月かけて東京中を巡ることになった。一人目の出演者を探すところからスタートし、その人は24時間以内に次の出演者を紹介するルールのもと、進められていった。それには年齢、性別、家族構成、国籍、そして、居住区といった、この巨大なメトロポリスの人口構造を映し出す特定の判断基準があった。この出演者探しは、はじめはたやすかった。しかし、日を追うごとに、この作業は難航していった。多様な基準を満たす人々が集まるにつれ、残りの基準に合う人々を見つけるチャンスは遠のいていった。埋めるべき穴があり、新たなるつながりが生まれ、一部の人はラジオや地域コミュニティを通じて見つけるほかなかった。しかし、約４カ月が経ち、100人の東京人が、東京芸術劇場の回転する円形状のステージに集結した。

今夜、彼らはパフォーマーであり、特別な人たちである――そして、彼らは一人ひとりが1パーセントだ。ステージ上の一人がおよそ90,553人の東京人を表すことになる。それと同時に、彼らは今日ぶっつけ本番で歌を披露する一つの合唱隊であり、さまざまな顔を持つ実在し得ない存在であり、私たちを体現してくれる美しく輝く表象である。彼らはトーキョーであり、統計の範疇を超える質問に対し、答えをくれる。そして、彼ら自身も質問をする側となる。忘れ去ってしまいたい行動の経験がある人は何人いるのか。何人の人が未来は今より良くなると考えているか。自分が住んでいるからこそ、この都市は特別であると思っている人たちはいるか。この舞台上での回答は、電話調査や投票所での回答と違うかもしれないと感じる人はいるのだろうか。

（翻訳：吉﨑香央里）

『100% トーキョー』の案内人・中村和幸先生に聞きました

――本作への統計アドバイザーとしての協力・出演依頼をどう受け止められましたか。

面白そうだけど、変なものがきたなと。ただ、長年統計学をやってきて、だんだんと問題の中心が「現実との接点」になってきたなと感じてはいたんです。だからこの舞台のように、いつもとは異なる視点で統計を使うことは、自分自身の課題と向き合うことにもつながるという気がしました。出演については……あまり考えないように、流れにまかせようかと。本番で着る服も、当日の朝決めようと思っています(笑)。

――ふだんはどんな研究をされているんですか。

いろいろなデータから「知識」を発見し、将来を予測しています。具体的には、神戸空港の埋め立て地の地盤沈下の進行を予測する技術をつくったり、津波の研究もしています。ちょっと変わったところだと、音楽の「ノリ」の研究。ドラムの叩き方の変化をみながら「ノリ」を見つけ、数値化するんです。それを利用すれば、音楽に自由な色づけをすることができるし、コンピューターが、だれか有名なミュージシャン風に演奏するというようなことも可能になる……といっても、この研究はまだ途中なんですけどね。

――都市計画から音楽まで、統計はいろいろな分野に繋がる学問なんですね。

たくさんのデータを読み解いて傾向を見つける、その方法をつくるのが統計学です。傾向を見つけるのにもさまざまな知識が必要ですし、時には直接対象にしているテーマとは違ったことを学ばないといけないこともある。たとえば、さっき言った地盤沈下の調査なら、データを集めるセンサーの特徴をよく知らないといけない。勉強することの多い分野です。

――この作品の出演者は、東京都の調べた5つの統計データに基づいて集められています。性別、年齢、国籍までは決められていて、中村先生にはそれらのリサーチと、残りの二つの要件(在住区、家族構成)を決めるところから参加して頂きました。

僕がいちばん苦労したのは「どこに住んでいるか」という項目です。どんなデータがこの舞台には必要なのか。城南とか城西とか、なるべく広いエリアごとの統計がいいのか、それとも沿線ごとがいいか……ドラマトゥルクのチームや、制作運営のチームとも何度か打ち合せをして、結局は「23区」といういちばん身近な区分を基準として採用することになりました。

――不採用になった項目や統計データにはどんなものがありますか。

選別の基準は、調べられるかどうかなんです。公的な統計でとれるデータの方が入手しやすいし、信頼性も高い。たとえば今回はスマートフォンの普及率を調べようというアイデアもありましたが、そもそも「普及」の定義自体決めづらいし、真っ当なデータがない。それから、学歴の統計も調べましたが、「無回答」が大変多く用いにくい。回答自体が比較対象になるような質問には、特に東京の人は答えたがらないようです。

――今回の経験が、今後の研究の役に立つことはありそうですか。

あると思います。たとえば東京23区の住民は900万人だけど、出演者は100人。統計学の観点からみると、サンプル数が足りない。それでも何か見えてくるものはあるのか。また、ここ数年の研究では「完全に真のものを捉えることはできない、極端にいえばあらゆるものは虚構である」と感じることが多くて。データそのものを使ったこの舞台で、どのくらい「東京」は見えてくるのか。その観察を通じて、僕の、一種哲学的な「認識」に関する考えもまた、変わっていくのかもしれません。

オリジナル音楽と映像、そして本物の都民が東京を伝える統計学に基づく前代未聞の「ライブ意識調査演劇」

桂 真菜（舞踊・演劇評論家）

「これが演劇?!」

「劇場で芝居を見るのではなく、トラックに乗って街を走るの?」

「舞台で資本論を説く人は俳優？　それとも本当の経済学者?」

2008年以来、日本を訪れるたびに型破りな公演で観客を驚かすリミニ・プロトコル（以下RP）は、演劇の領域を広げるアート・プロジェクト・ユニットだ（＊1）。フランクフルトで2000年に結成されたRPは、現在40代前半の演出家3人（ヘルガルド・ハウグ、シュテファン・ケーギ、ダニエル・ヴェッツェル）を中心に、プロジェクトごとにスタッフ&キャストを組む。テーマに応じてスタイルを転じる大胆さは、パフォーミングアーツの可能性を拓き、時には上演システムまで開発してしまう。ドキュメンタリー演劇のリーダーと呼ばれるRPの主な特徴を3つ挙げよう。

1　テキストの素材は「現実」。日常に密着したテーマを取り上げ、綿密なリサーチに沿って内容を構成し、周到に演出を練る。戯曲や物語などの虚構を引用する場合もある（＊2）。

2　出演者は作品のテーマに連なる特別の体験をもつ人や専門家（エキスパート）。プロの俳優は起用しない。

3　上演場所は多彩。観客が屋外を移動しながら体験する作品も、成功させた。

加えて記せば、鉄道模型、劇場型改造トラック、カール・マルクス著『資本論』など意表を突くモティーフを活かすため、RPは音楽や映像を巧みに使う。ローテクとハイテクを絶妙に混ぜ、実験性の高い新作を多様な人が受け止めやすいよう心を配る。労働や戦争にまつわる深刻な問題を扱う際にも、ユーモアを漂わす。政治や社会の責任を糾弾せずに事象を示す手法は、観客の思考を幅広い方向から耕していく。

グローバリゼーションなどの大きい潮流に触れられる設定も、国境を超えて人々の共感を呼んだ。「現代芸術は難解だけれど、リミニは刺激的で面白い」という支持層も育ち、世界各国から招かれる人気グループに成長した。

さて、このたび東京で創られた『100%トーキョー』は、都市をテーマに置くシリーズのアジア初演である。各都市の住民との協力で成り立つ『100%』シリーズは、ベルリンで08年に誕生してから欧・豪・北米で10カ所以上を巡り、今後は韓国での上演も予定される。各都市の事情に沿って内容は柔軟に変わるが、「統計学に基づいて選ばれた100人の市民が質問に答えながら繰り広げる」点は共通。

筆者が昨夏、英国で見た『100% ロンドン』（2012年6月29日 Hackney Empire Theatre）の舞台では、市民が溌剌と弾んでいた。魅了されたのは、芝居やダンスなどの特殊技能を持たない「普通の人々」が、ふいに輝く瞬間。出演者のちょっとした仕草や表情にも、心が震えた。

メロドラマの劇的な再生なら、多数の観客が泣く箇所の見当がつく。けれど、『100%』シリーズは見る人によって惹かれるポイントが異なる。予測不可能な流れは、降り注ぐ質問に対して冷静な鑑賞者でいるより、返事を迫られる参加者に近い姿勢で臨むほうが深く味わえる。

母子3人の出演者もいたが、「10〜19歳、英国籍の白人、イースト・ロンドンに両親や兄弟と同居」

という条件にぴったりの兄弟と、同じ環境で「35〜54歳」の枠にはまる親の「共演」だ。出演者全員が好きな小道具を携えて登場するが、各自が話す内容は演出家が決める。ロンドンに来た事情を通して、現代史を鮮やかに切り取った女性の言葉が記憶に残る。

ステージには複数のカメラが配され、後方に浮かぶ満月型のスクリーンが、出演者の動きを映す。床に設えられた円を左右に分ける直径を境界線に見立て、質問の答えがYesなら右、Noなら左。「神を信じるか？」「同性愛者の結婚を認めるか？」「嘘をついていないか？」等の問いに応じて歩く100の身体は、グラフィックな模様を形成しつつ、刻々と変化を遂げる。

本稿を認(したた)めている時点では、『100% トーキョー』に使う質問の詳細は不明だ。しかし、Yes/Noの答えを出演者が求められることは確か。おそらく、二択の境界線で立ち往生する者が出る。だが、迷ってもいいではないか。RPの他の作品と同様、本作にも決まった方向に観客を導く意図は無いのだから。

23区に絞った東京版の創り方について少し述べよう。最初の難関は100人の出演者を集める作業だ。東京都の調査による統計（＊3)を守る人探しは縛りがきつい。たとえば、23区の住民のうち3%が外国人なので、出演者100人のうち3人は外国人だ。「韓国人、中国人、その他」が各1%、というデータに従って適切な候補を捜さなくてはならない。

「100%シリーズ」のルールには、出演者をつなぐ「チェーン・リアクション」も。参加が決まった人が、24時間以内に次の候補を紹介する仕組みだ。

出演者にはスタッフがインタビューを行う。集めた声はテキストや演出の素材となり、観客に配る冊子にも生かされる。23区ごとの性別・年齢別の人口や土地の価格などのデータ、そして出演者たちの写真＋プロフィールを収めた冊子と共に舞台を眺めれば、数字の背景に息づく生命が伝わる。

冊子に並ぶデータは客観的で、出演者は実際に見聞きしたことのみを話す――しかし、「本当のこと」を編んでも、作品は現実そのものとは違う。ただ、この場に集った全員が都市と個人をつなぐ回路をたどるチャンスに恵まれた、といえるかもしれない。リミニ・プロトコルと日本のスタッフ＆キャストが提供する稀有な時空間で、楽団「焚火」の奏でるオリジナル曲に乗って、前代未聞の「ライブ意識調査演劇」を楽しもう。

＊1　来日したリミニ・プロトコル作品は以下の4作品。
『ムネモパーク』東京国際芸術祭（TIF）2008 構成・演出：シュテファン・ケーギ
『カール・マルクス：資本論、第一巻』F/T09春 コンセプト、演出：ヘルガルド・ハウグ、ダニエル・ヴェッツェル
『Cargo Tokyo-Yokohama』F/T09秋 構成：シュテファン・ケーギ、演出：イェルク・カレンバウアー
『ブラック・タイ』2011世界の小劇場 〜vol.1〜　ドイツ編、脚本・演出：ヘルガルド・ハウグ、ダニエル・ヴェッツェル 脚本共著、出演：ミリアム・ユン・ミン・シュタイン

＊2　2005年に上演した『選挙戦・ヴァレンシュタイン』（企画、演出：ヘルガルド・ハウグ、ダニエル・ヴェッツェル）は、シラー作『ヴァレンシュタイン』をもとに現代人が自分史を語る斬新な作品。プロの俳優は登場しない。

＊3　公式の統計となる国勢調査は5年に一度のみ。作品に使用する人口などの数字は、人の出入りや住民票などのデータを基にした、東京都の調査による推計。

作・構成：リミニ・プロトコル（ヘルガルド・ハウグ、シュテファン・ケーギ、ダニエル・ヴェッツェル）
演出：ダニエル・ヴェッツェル
ドラマトゥルク・共同演出：セバスチャン・ブリュンガー
舞台・照明デザイン：マーク・ユングライトマイヤー、マーシャ・マズール
映像：マーク・ユングライトマイヤー

出演：
青山 稔、秋山美海、秋山涼太郎、天辰哲也、李 昌枝、以倉敦子、以倉 温、石川佳代、石本紀子、市原克枝、井出秋人、井出辰之助、ジョニー・K・伊藤、井上留菜、今井康悟、今城加奈子、岩壁祐輝、上野智美、牛込圭哉、内山友斗、榎園歩希、遠藤麻理、岡田啓子、岡田祐煌、岡田友美佳、奥田知子、奥田はな、越智雅史、小淵はる美、小淵陽介、狩野雄介、上村正子、川端健嗣、神野鷹彦、神戸麻千子、紀 旭、菊池恵子、木下勝弘、栗田知宏、古川綾乃、小菅知恵、児玉悟之、ブリジット・コナー、小林正吾郎、小林宏明、齋藤桂太、坂本 樹、坂本享介、坂本博子、坂本凛華、篠原かおり、篠原那波、須能和彦、関島弥生、関戸恵美子、関戸淳一、関根さやか、瀬野美佐、染谷多美子、髙木敏夫、髙田鐵也、髙橋眞三樹、田中佑奈、田村隆雄、富樫 凜、中村和幸、永井英之、永山明弘、西口陽介、西田太一、西山佐智子、西山千鶴、二瓶文隆、ロナルド・アマト・ハセガワ、秦 愛子、秦 翔生、秦 信明、林 陽里、原 緑、広川裕太郎、深堀けい子、藤田修平、前川幸哉、町田 健、松岡久乃、丸野 正、三毛あんり、水稀万結、宮内文子、村井和枝、望月恭子、望月梓行、望月敏弘、守尾千恵子、山口航平、山口大樹、山下萌花、山本はる乃、山本 貫、吉井 光、李ゆうしん

東京公演スタッフ
ドラマトゥルク：セバスチャン・ブロイ
キャスティング：石塚 俊、小野塚 央
統計アドバイザー：中村和幸
アソシエート・ドラマトゥルク／プロンプター：萩原ヴァレントヴィッツ健
演出補：大谷賢治郎
ローカライズ設計：深沢秀一

ハンドブック
編集：影山裕樹（OFFICE YUKI KAGEYAMA）
マンガ：死後くん
デザイン：中澤耕平、菊地昌隆（ASYL）

楽団「焚火」：
作・編曲 ：Takuji
演奏：「焚火」［Takuji（歌・ギター・キーボード）、木津茂理（歌・和太鼓・三味線）、大島保克（歌・三線）、アン・サリー（歌）、世武裕子（ピアノ）、小林眞樹（ベース）、千住宗臣（ドラム）、塩谷博之（ソプラノサックス・クラリネット）］
PA：葛西敏彦
楽団運営：清宮陵一

サウンドデザイン：小島ケイタニーラブ＋ゴンドウトモヒコ

技術監督：寅川英司＋鴉屋
アシスタント：河野千鶴
舞台監督：弘光哲也
演出部：ラング・クレイグヒル、北村泰助
美術コーディネート：福島奈央花
小道具コーディネート：長谷川ちえ、横川奈保子
照明コーディネート：佐々木真喜子（株式会社ファクター）
音響コーディネート：相川 晶（有限会社サウンドウィーズ）
映像コーディネート：遠藤 豊（ルフトツーク）
映像オペレート：石塚 俊
プロンプター：萩原ヴァレントヴィッツ健
通訳：長田紫乃

記録写真：片岡陽太
記録映像：株式会社彩高堂「西池袋映像」

F/Tスタッフ
制作統括：武田知也
制作：戸田史子
制作アシスタント：小野塚 央、中村麻美
フロント：済賀未央
プログラム・ディレクター：相馬千秋

ユース・アート・マネジメント・プログラム（YAMP）：清水裕花

協力：東京ドイツ文化センター
後援：ドイツ連邦共和国大使館
製作：フェスティバル/トーキョー、リミニ・プロトコル
主催：フェスティバル/トーキョー

GOETHE INSTITUT
ドイツと日本
Zukunft gestalten
ともに未来へ

Concept, Format: Rimini Protokoll (Helgard Haug, Stefan Kaegi, Daniel Wetzel)
Direction: Daniel Wetzel
Dramaturge, Co-Direction: Sebastian Brünger
Stage Design, Lighting: Marc Jungreithmeier, Mascha Mazur
Video: Marc Jungreithmeier

Cast:
Minoru Aoyama, Mimi Akiyama, Ryotaro Akiyama, Tetsuya Amatatsu, Changji Lee, Atsuko Ikura, On Ikura, Kayo Ishikawa, Toshiko Ishimoto, Katsue Ichihara, Akito Ide, Tatsunosuke Ide, Johnny K Ito, Runa Inoue, Yasunori Imai, Kanako Imajo, Yuki Iwakabe, Tomomi Ueno, Keiya Ushigome, Yuto Uchiyama, Ayuki Enokizono, Mari Endo, Keiko Okada, Yuki Okada, Yumika Okada, Tomoko Okuda, Hana Okuda, Masashi Ochi, Harumi Obuchi, Yosuke Obuchi, Yusuke Kano, Masako Kamimura, Kenji Kawabata, Takahiko Kanno, Machiko Kanbe, Ji Xu, Keiko Kikuchi, Katsuhiro Kinoshita, Tomohiro Kurita, Ayano Kogawa, Chie Kosuge, Satoshi Kodama, Brigid Connor, Shogoro Kobayashi, Hiroaki Kobayashi, Keita Saito, Itsuki Sakamoto, Kyosuke Sakamoto, Hiroko Sakamoto, Rinka Sakamoto, Kaori Shinohara, Nanami Shinohara, Kazuhiko Suno, Yayoi Sekijima, Emiko Sekido, Junichi Sekido, Sayaka Sekine, Misa Seno, Tamiko Someya, Toshio Takagi, Tetsuya Takada, Masaki Takahashi, Yuna Tanaka, Takao Tamura, Rin Togashi, Kazuyuki Nakamura, Hideyuki Nagai,Akihiro Nagayama, Yosuke Nishiguchi, Taichi Nishida, Sachiko Nishiyama, Chizuru Nishiyama, Fumitaka Nihei, Ronald Amato Hasegawa, Aiko Hata, Shosei Hata, Nobuaki Hata,Hisato Hayashi, Midori Hara, Yutaro Hirokawa, Keiko Fukabori, Shuhei Fujita, Yukiya Maegawa, Ken Machida, Hisano Matsuoka, Sei Maruno, Anri Mike, Mayu Mizuki, Fumiko Miyauchi, Kazue Murai, Kyoko Mochizuki, Shian Mochizuki, Toshihiro Mochizuki, Chieko Morio, Kohei Yamaguchi, Daiju Yamaguchi, Moeka Yamashita, Haruno Yamamoto, Mitsugu Yamamoto, Hikaru Yoshii, Yushin Lee

Tokyo Performance Staff
Dramaturge: Sebastian Breu
Casting: Shun Ishizuka, Chika Onozuka
Statistics Advisor: Kazuyuki Nakamura
Associate Dramaturge, Prompter: Ken Hagiwara-Wallentowitz
Direction Assistant: Kenjiro Otani
Localization: Shuichi Fukazawa

Booklet
Editing: Yuki Kageyama (OFFICE YUKI KAGEYAMA)
Comic: sigo-kun
Design: Kohei Nakazawa, Masataka Kikuchi (ASYL)

Music Band Takibi
Music, Arrangements: Takuji
Musicians: "Takibi" [Takuji (guitar, keyboards, chorus), Shigeri Kitsu (vocals, taiko, shamisen), Yasukatsu Oshima (vocals, sanshin), MAREWREW (vocals), Hiroko Sebu (piano), Shinju Kobayashi (bass), Muneomi Senju (drums), Ryouichi Kiyomiya (bandmaster)]
PA: Toshihiko Kasai

Sound Design: Kojima Keitaney Love + Tomohiko Gondo

Technical Manager: Eiji Torakawa + Karasuya
Assistant Technical Manager: Chizuru Kouno
Stage Manager: Lang Craighill
Stage Assistants: Tetsuya Hiromitsu, Taisuke Kitamura
Stage Design Co-ordination: Naoka Fukushima
Prop Co-ordinationvChie Hasegawa, Nahoko Yokokawa
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)
Video Co-ordination: Yutaka Endo (LUFTZUG)
Video Operation: Shun Ishizuka
Prompter: Ken Hagiwara-Wallentowitz
Translation: Shino Nagata

Photography: Yohta Kataoka
Video Documentation: Saikoudo Co., Ltd.

F/T Staff
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordination: Fumiko Toda
Assistant Production Co-ordinators: Chika Onozuka, Asami Nakamura
Front of House: Mio Saiga
Program Director: Chiaki Soma

Youth Arts Management Program(YAMP): Yuka Shimizu

In co-operation with Goethe-Institut
Endorsed by the Federal Republic of Germany
Produced by Festival/Tokyo, Rimini Protokoll
Presented by Festival/Tokyo

フェスティバル/トーキョー組織委員

天児牛大	振付家、演出家
荻田伍	アサヒグループホールディングス株式会社 代表取締役会長 兼 CEO
扇田昭彦	演劇評論家
永井多恵子	公益社団法人国際演劇協会（ITI /UNESCO）日本センター会長
蜷川幸雄	演出家
野田秀樹	演出家
野村萬	狂言師
福原義春	株式会社資生堂 名誉会長

（50音順）

フェスティバル/トーキョー実行委員会

名誉実行委員長	高野之夫	豊島区長
実行委員長	市村作知雄	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 会長
副委員長	吉末昌弘	豊島区文化商工部長
委員	八巻規子	豊島区文化商工部文化デザイン課長
	大沼映雄	公益財団法人としま未来文化財団 常務理事 / 事務局長
	岸正人	公益財団法人としま未来文化財団 部長
	蓮池奈緒子	NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長
	相馬千秋	NPO法人アートネットワーク・ジャパン プログラム・ディレクター
監事	天貝勝己	豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登（骨董通り法律事務所）	

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

プログラム・ディレクター	相馬千秋
事務局長	蓮池奈緒子
事務局次長	小島寛大
制作統括	武田知也
制作	河合千佳、喜友名織江、小森あや、 椙山由香、高橋マミ、戸田史子
公募プログラムコーディネート	小山ひとみ
メディア戦略・広報	松本花音
メディア戦略・広報アシスタント	北沢聡子、田村かのこ
オープン・プログラム	藤井さゆり
オープン・プログラムアシスタント	田野入涼子、後藤天
票券	長原理江
票券アシスタント	菅原凌、尹禎敏
チケットセンター	佐々木由美子、佐藤久美子
総務	葦原円花、一色壽好
経理	堤久美子、青木亮子
技術監督	寅川英司
技術監督アシスタント	河野千鶴
照明コーディネート	佐々木真喜子（株式会社ファクター）
音響コーディネート	相川晶（有限会社サウンドウィーズ）
アートディレクション＋デザイン	アジール（佐藤直樹＋中澤耕平＋菊地昌隆）
ウェブサイト	濱田真一＋北島識子＋重松佑（株式会社ロフトワーク）
パブリシティ	平昌子、望月章宏
海外広報・翻訳	アンドリューズ・ウィリアム
物販	渡辺淳
編集・執筆	鈴木理映子

主催：フェスティバル/トーキョー実行委員会
東京都／豊島区／アーツカウンシル東京・東京文化発信プロジェクト室・東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）／公益財団法人としま未来文化財団／NPO法人アートネットワーク・ジャパン
共催：公益社団法人国際演劇協会（ITI/UNESCO）日本センター
協賛：アサヒビール株式会社、株式会社資生堂、ブルームバーグ エル・ピー
助成：公益財団法人アサヒグループ芸術文化財団
後援：外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会
特別協力：西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、株式会社サンシャインシティ、チャコット株式会社
協力：東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋インバウンド推進協力会、池袋ホテル会
メディアパートナー：ART iT、J-WAVE 81.3 FM、新潮、CINRA.NET、美術手帖
ホテルパートナー：サンシャインシティプリンスホテル、ホテルメトロポリタン、ホテル グランドシティ、サクラホテル池袋
地域パートナー：池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人ゼファー池袋まちづくり
宣伝協力：株式会社ポスター・ハリス・カンパニー、有限会社ネビュラエクストラサポート（公募プログラム）
会場協力：アサヒ・アートスクエア（公募プログラム）
認定：公益社団法人企業メセナ協議会

平成25年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ

［会期］平成25年11月9日（土）～12月8日（日）

Festival/Tokyo Organization Committee

Ushio Amagatsu	Choreographer, Director
Hitoshi Ogita	Chairman and Representative Director, Chief Executive Officer, Asahi Group Holdings, Ltd.
Akihiko Senda	Theatre critic
Taeko Nagai	Chairman, Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Yukio Ninagawa	Director
Hideki Noda	Director
Man Nomura	Kyogen actor
Yoshiharu Fukuhara	Honorary Chairman,Shiseido Co.,Ltd

Festival/Tokyo Executive Committee

Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano, Mayor of Toshima City
Chairman of the Executive Committee: Sachio Ichimura, Arts Network Japan Director
Vice Chairman of the Executive Committee: Masahiro Yoshizue, Director of Culture, Commerce and Industry Division of Toshima City
Committee Members:
Noriko Yamaki, Culture, Commerce and Industry Division, Director of Cultural Design Section
Hideo Onuma, Director of Secretariat of Toshima Future Culture Foundation
Masato Kishi, Executive Manager of Toshima Future Culture Foundation
Naoko Hasuike, Arts Network Japan Representative
Chiaki Soma, Arts Network Japan Program Director
Supervisor: Katsumi Amagai, General Affairs Division, Director of General Affairs Section of Toshima City
Legal Advisors: Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Executive Committee Office

Program Director: Chiaki Soma
Administrative Director: Naoko Hasuike
Vice Administrative Director: Hirotomo Kojima
Production Manager: Tomoya Takeda
Production Co-ordinators:
Chika Kawai, Orie Kiyuna, Aya Komori, Yuka Sugiyama, Mami Takahashi, Fumiko Toda
Emerging Artists Program Co-ordination: Hitomi Oyama
Media Strategy: Kanon Matsumoto
Media Strategy Assistants: Satoko Kitazawa, Kanoko Tamura
Open Program: Sayuri Fujii
Open Program Assistants: Suzuko Tanoiri, Takashi Goto
Ticket Administration: Rie Nagahara
Ticket Administration Assistants: Nagisa Sugahara, Jyonmyong Yoon
Ticket Center: Yumiko Sasaki, Kumiko Sato
Administrators: Madoka Ashihara, Hisayoshi Isshiki
Accounting: Kumiko Tsutsumi, Ryoko Aoki

Technical Director: Eiji Torakawa
Assistant Technical Director: Chizuru Kouno
Lighting Co-ordination: Makiko Sasaki (Factor Co., Ltd.)
Sound Co-ordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction + Design: Asyl (Naoki Sato + Kohei Nakazawa + Masataka Kikuchi)
Website: Shinichi Hamada + Satoko Kitajima + Yu Shigematsu (loftwork Inc.)
Public Relations: Masako Taira, Akihiro Mochizuki
Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Merchandise: Jun Watanabe
Editor/Writer: Rieko Suzuki

Organized by Festival/Tokyo Executive Committee
Tokyo Metropolitan Government, Toshima City, Arts Council Tokyo & Tokyo Culture Creation Project &Tokyo Metropolitan Theatre (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), Toshima Future Culture Foundation, NPO Arts Network Japan (NPO-ANJ)
Produced in association with Japanese Centre of International Theatre Institute (ITI/UNESCO)
Sponsored by Asahi Breweries, Ltd., Shiseido Co., Ltd., Bloomberg L.P.
Supported by Asahi Group Arts Foundation
Endorsed by Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO
Special co-operation from SEIBU IKEBUKUROHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE IKEBUKURO, TOBU RAILWAY CO., Ltd., Sunshine City Corporation, Chacott Co., Ltd.
In co-operation with the Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporation Association, Ikebukuro Inbound Association, Ikebukuro Hotel Association
Media Partners: ART iT, J-WAVE 81.3 FM, SHINCO, CINRA.NET, Bijutsu Techo
Hotel Partners: Sunshine City Prince Hotel, Hotel Metropolitan Tokyo, Hotel Grand City, Sakura Hotel Ikebukuro
Regional Partners: Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr
PR Support: Poster Hari's Company, Nevula Extra Support Co., Ltd. (for F/T Emerging Artists Program)
Venue Co-operation: Asahi Art Square (F/T Emerging Artists Program)

Approved by Association for Corporate Support of the Arts

Supported by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2013

ユース・アート・マネジメント・プログラム（YAMP）：石井菜保子、伊集院萌、伊藤安那、伊藤羊子、稲垣美実、乾亜沙美、今井美希、植村 真、太田 光、緒方彩乃、紙 弘幸、川又美槻、栗田知宏、輿水すみれ、崔 潤、作田荒鳥、佐藤成行、澤田 唯、清水裕花、菅井新菜、田中ゆかり、谷川仁美、塚田佳都、野口 彩、平沢花彩、堀 朝美、的場久美、三浦彩歌、水野恵美、守山真利恵、山崎 優、山本美幸、吉田恭大、吉田由貴

F/T クルー：青木奈々絵、青木由季、青柳佐代子、阿原乃里子、荒川真由子、飯森明香、五十嵐皓子、石川世梨、石川祐大、猪又義雄、今泉友来、岩城泰斗、大泉尚子、大嶋絢子、大津侑子、大村真央、大和田真未、岡本静華、小野寺あり子、小野茉奈佳、鐵味瑞代、片桐桃子、加藤眞之介、加藤真帆、加藤佑麻、金子穣為、川名智子、桐谷佳美、工藤美咲、桑島剛史、郷舞衣子、小平怜奈、五藤 真、後藤美波、小林潤平、齋藤ルイサ、崎濱恵梨、佐藤秋香、佐藤直子、柴田 光、清水裕加里、霜島桜子、杉崎由佳、鈴木淳子、鈴木朋子、関島弥生、平恵梨香、平 七海、高田怜佳、高橋 類、高松章子、筐日向子、竹之内さやか、竹之内葉子、田中佑佳、手塚 哲、寺元奈津美、照沼静香、戸塚 碧、豊田知子、ドランクザン望、中村直樹、中村光子、中村優子、中野雄斗、西本健吾、平松里佳子、広田 牧、藤田 輝、藤田 琳、藤林さくら、ブリジット・コナー、古庄美和、堀越蒔李子、溝口 侃、村川柄子、村田陽亮、百瀬美樹、矢田沙和子、山口侑紀、山科有於良、米谷今日子、四方田鎮子、和田幸子、渡邊早紀 ほか

発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会　〒170-0001　東京都豊島区西巣鴨4-9-1 にしすがも創造舎　NPO法人アートネットワーク・ジャパン内　TEL：03-5961-5202　http://festival-tokyo.jp/
編集：鈴木理映子、フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局　アートディレクション＋デザイン：佐藤直樹＋中澤耕平（ASYL）、小林 剛
禁無断転載
※内容は変更になる場合がございます。ご了承ください。